

### カキの低樹高化に関する研究

#### 第3報 苗木の大小が定植後の生育・収量に及ぼす影響

濱地文雄・姫野周二・清水博之・\*森田 彰・\*\*恒遠正彦  
(福岡県農業総合試験場・\*福岡県農業大学校・\*\*福岡県八女西部農業改良普及所)

Fumio HAMACHI, Shuuji HIMENO, Hiroyuki SHIMIZU, Akira MORITA and Masahiko TSUNETOU : Growing Techniques for Making Low Persimmon Tree.

#### 3. Influence of Nursery Stook Size on the Growth and Yield

植付け時の苗木の大小が、その後の生育量及び収量に及ぼす影響を調査し、低樹高化について検討したので、その結果を報告する。

##### 1. 材料及び方法

供試品種は“松本早生富有”(共台)を用い、1979年3月定植した。園地の土壌は花こう岩質中粗粒黄色土で、開園時全面を深さ60cm深耕した。試験区はカキ苗木の出荷規格の等級によって分類し、大苗区(特等苗・苗木重228g)、中苗区(1等苗・苗木重142g)、小苗区(2等苗・苗木重88g)の3区を設けた。試験規模は1区1樹5反復とした。なお、植付け後の整枝は開心自然形とし、栽培管理は慣行に準じた。

##### 2. 結果及び考察

1) 樹高、樹容積から見た樹の大きさは、大苗区が最

も大きく、次いで中苗区で小苗区が小さかった。この大きさの差は年次と共に大きくなるようであった。

2) 新梢本数、新梢伸長量等の生育量は、大苗区、中苗区、小苗区の順に少なく、小苗区が最もわい化した。また、新梢の長さ別割合は、短枝では大苗区、中苗区、小苗区の順に多かった。

3) 1樹当たり収量は大苗区、中苗区、小苗区の順で少なくなったが、果実の肥大は小さい苗の区の方がよく、果皮色も進んでいた。

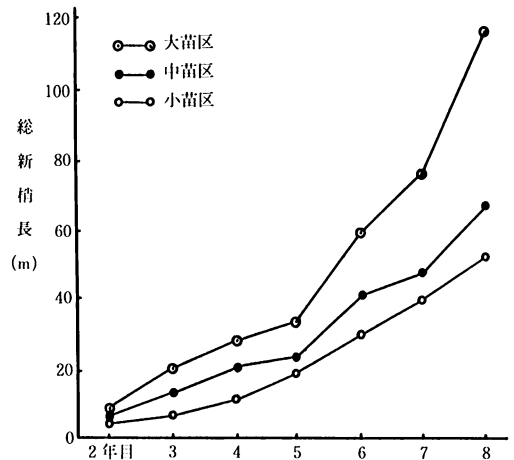
以上の結果、苗木の大きさは樹高・新梢伸長量に大きく影響し、低樹高化手段として中苗及び小苗の利用が効果的で果実の肥大・着色も良好であった。しかし、1樹当たりの収量がやや少ないので、収量確保のためには、わい化の程度に応じて植付け本数を増加する必要がある。

第1表 生育量 (1986年)

試験区	樹高	樹容積	幹周	総新梢長	夏枝率
	cm	m <sup>3</sup>	cm	m	%
大 苗	395	24.9	27.3	75.5	19.8
中 苗	364	17.8	24.5	48.6	12.1
小 苗	352	16.0	22.2	40.6	13.1

第2表 収量 (1984~'87年平均)

試験区	収量	1果重	果皮色	糖度
	kg	g	カラーチャート	%
大 苗	21.6	256	5.8	14.9
中 苗	18.7	274	5.9	15.4
小 苗	14.7	280	6.2	15.4



第1図 定植後の新梢伸長量(1樹当たり)